

私の作品演奏会

端山貢明



私は作品が少ない。芸大時代から数えて、今度の新作三つを入れても七曲しかない。この他にも習作や未完の大局や敢て没にした一連の完成品等があるのだがこれらはそれぞれ（示唆とか素描とか）色々な意味や形で結局他の曲に吸収されている。また、ある物はいずれそうなるだろうと思う。

この分を書いたり又他の必要もあって、それら、古いものを今度色々ひろげて見たのだが、この短くない年月、私が常に音楽について持っていた希いと云うかある時間を音について持っていた希いと云うかある時間を音に置きかえられた思惟により構成して行く方法に対する、又は、組み合わせられた響のつながりに対する好みが見え、技法上の変化にもかかわらず、深い所であまりにも変わっていないのに実は驚いた。

（前作は、常に大きく意識される物だし、求める物を究極まで追いつめればそこに、自から一つの秩序が生れるのは当然なのだが）作曲をする期間のあまりにも偶然に支配されすぎるときの所産を作品として定着してしまうのに危惧を持っていた私にこのことは大きな安堵を与えた。

技法としてはヴィオラ協奏曲に始る、自足する単位とそれの変容のつらなりによる構成が基になっている。単位は細胞と呼んでもよいのだが細胞本来の分裂し増しよくする性質から発展的に変化する意味を持ってしまふのでさげたい。すなわち私の場合音楽は単位の敷衍ではなく変容のつらなりなのである。この変容は、ある時は、原子に熱を加えた場合、核を中心に廻っている電子の廻転半径が大きくなると云った形で行なわれる。ある時は自ら発光するが、単位はあくまでぼうちょうし変容するのみで、これはヨーロッパ的な主題の展開による音楽とは相当に異質の物であるような気がする。ここでヨーロッパ的と云う言葉を使ったが私は音楽上の資質を民族単位でとたえるつもりはない。とくに日本人だから日本の音楽をと云った幼稚な単純な考にふれるつもりは全くないが偶然乍ら日本に30年近く生きて多くの知識が私の中に作り上げた一つの国は、ヨーロッパで出会った音楽家それ

ぞれの国とは大分異っていた。それは敢えて呼べばやはり日本と云うことになるのだろうか。

私はある主義をかかげて作曲するのを最も好まない。今まで書いて来た事もだから、私が旗をかざして歩く主義ではなく過古の作品を見たり又現に作曲したりしている時常に感じたり考えたりしている事なのである。今の所私の国は大変強固で崩びそうもない。だからこれからしばらく私の曲は今の傾向を持つに違いない。(25日 7時 第一生命ホール)

(『音楽案内』1962年6月号(日本音楽家クラブ発行)22~23頁)

1962/06/25、第一生命ホールで催された「端山貢明作品演奏会」にちなみ同冊子に掲載された寄稿原稿。端山自身が所蔵していた冊子を原本としてテキストコード化したが、そこには誤植等の訂正が端山自身の手書きで書き加えられている。その他にも下記の誤植があり訂正した。

(誤植の訂正箇所)

素猫 → 素描

究局 → 究極

変容のつらなりによる構成 → 変容のつらなりによる構成